

REPORT

ニューメディアをひっかきまわす若い母親たち

国立婦人教育会館新教育メディア研究開発事業

高知市初月小学校PTA

昭和音楽大学短期大学部助教授 西村美東士

国立婦人教育会館（以下、たんに会館と呼ぶ）の「新教育メディア研究開発事業」も3年目を迎えている。この事業は「人びとの多様化、個別化する学習ニーズへの対応や家庭教育に関する学習方法の改善、充実に図るため、通信系マルチメディアを活用した遠隔講座のあり方、家庭教育に関するマルチメディアデータベースの開発、提供方法について調査研究を行う」ものである。

第1年次の平成7年度は会館と北海道札幌市道民活動センターの2会場を結び、フォーラム「家庭教育」として、基調講演とパネルディスカッションが行われた。翌8年度は、1会場の参加者を30人程度、すなわち教室程度の中規模として、会館と、千葉県、新潟県の3会場を結び、3回にわたって遠隔講座「父親の

子育て」が実施された。その際、会館が開発したマルチメディアデータベースやインターネットによる情報が活用されている。

本年度は、これをさらに小規模化して発展させ（一）、遠隔講座「子育てにやさしいまちづくり」と題して、東京の烏山プレーパークをつくる会、大阪のミズ・プランニング、高知の初月小学校PTAという3つのボランティア・グループをテレビ会議システムを使って結び、名城大学や国立婦人教育会館から、まちづくりコーディネータの延藤安弘さん（千葉大学教授/名城大学非常勤講師）の遠隔授業や、グループ間の交流学習が、第4ステージに至るまで展開されている。技術的には、財団法人AVCCなどがバックアップしている。ばくは本年9

月9日の第1ステージに初月小をたずねた。

初月小PTAは、3年前に2年生の親子行事として「みかづきまちかど探検隊」を実施するなど、いきいきとPTA活動を行っている。これは子どもたちがまちの宝物を発見して地図上に表現するという試みで、学校の先生も「ナゾの人物」として関守の役を買って出るなど、幅広い層のサポーターの大人たちまでもが太いに楽しんだということである。このような地図をガリバーマップという。

あたかもガリバーになったかのよう、自分たちのまち全体の大地図を眺めることは、いろいろな効能があるようだ。午前中、各会場に分散した研究協力者の会議がテレビ会議を通して開かれ、ばくも一委員として参加した。自画面に自分の顔が映るのに緊張してしまっただけ。午後、いよいよ遠隔講座の本番が開始された。講師の延藤教授「参加者の自由な発想を大切に、枠にとらわれないプログラム運営を」の考え方のもとに、各地自慢のお菓子の交換会、プラカードによるアンケート実施など、リアルタイムで互いの顔やしぐさが見える通信とマルチメディアの楽しさをうまく活かした交流と学習のプログラムが展開された。

初月小に集まった高知の若い母親たちは、これらのメディアを十分ひっかきまわして遊んでいたというのが、ばくの感



初月小PTA学年通信ブクブクパットより
「チラッとのぞきにきませんか？」
TV画面を通じて、遠く離れたお母さん
たちと、お喋りを楽しみましょう！

【ACCESS】
内容面 国立婦人教育会館
TEL 04993 (62) 6711
技術面 財団法人AVCC
TEL 03 (3239) 1121

話しあわれた内容は、初月小のほか、次のとおりである。鳥山ブレイクパークをつくる会は、自分の責任で自由に遊ぶブレイクパークの意義と、それを役所まかせにしているというところ、大阪のミズ・プランニングは、パソコン通信や電子メールを活用して「子連れだからでけない」から「子どもがいるからこそできる」という街をめざして、子連れ情報誌や育成講座を実施したことなどについてテレビカメラに向かって語りかけていた。

初月小PTAにおいては、その会員であるとともにまちづくりのデザイナーに公私ともに関わっている串中智子さんあたりが仕掛け人の一人のようである。彼女のように楽しいことが好きで、何でも面白がってやってみようという個性をもった人たちの役割は大きい。まさに「気軽におしやりする」ような自然体の水平な感覚で、今後のマルチメディアや通信技術などを「学習ツール」、「新教育メディア」としてひっかきまわして使ってくれると、ニューメディアも人間の匂いのある魅力ある道具に変身できるのだらう。

想である。カメラの準備中も、いつものPTA活動の打ち合わせを平気で楽しげにしている。自画面に映っていた人がいたので、ぼくが「映っているよ」というと、カメラに向かってしなをつくるし、映りが悪いので「被写体が悪いんじゃない」とつぶやくと、パシッとたたくふりをする。

ただ、延藤教授に関しては高知にもファン(?)が多く、画面での登場に親しげな歓声が上がったが、ほかのグループの画面に対しては、活動そのもののへの関心はあっても、個人的な関心や知り合いの関係があつての上ではないので、「いまひとつ気軽におしやりできない」という母親たちの感想であつた。このへんは、やはり、マルチメディアがフエー

ス・ツール・フェースの直接交流の補充、促進の手段としての役割は果たすことができても、直接交流を不要とするまでの効力はないということを示しているのである。

しかし、さすがに「のびのび風土」の初月小PTAである。今回の遠隔講座についても、「チラッとのぞきにきませんか」というおしやり感覚のもと、学年通信で会員に参加を呼びかけている。実際、初月ばかりでなく、どの会場もふだんの活動の場でざわざわした様子が画面に映っており、その限りでは自然体での交流が深まったように思われる。母親たちが緊張しそうな顔でも、連れてきた子どもたちがいつもどおり騒いでしまっ